「ペヌエルでの格闘」（創世記三二・二三～三三）

1　ヤボクの渡し

今日は、創世記三二章の後半です。

二〇年ぶりに帰郷するヤコブ、故郷カナンは目前です。帰るに当たっての最大の懸念は兄エサウの存在です。

二〇年前ヤコブは、兄エサウから、長子の権利を欺し取り、父イサクからは、自分をエサウだと偽って、祝福を奪い取った。あの時のことを、エサウはゆるしてくれるだろうか、憎悪と殺意はおさまっているだろうか、それが、いまヤコブを支配している激しい不安と恐れです。その気持ちを、ヤコブは、祈りの中で、端的にこう言い表していました。

どうか、兄エサウの手から救ってください（三二・一二）。

短い言葉です。しかし真実の願いです。これが、先週取り上げたヤコブの祈り（三二・一〇～一三）の核心部分にほかなりません。ヤコブは神を呼び求めます。しかしヤコブという人は、祈るだけでなく、祈ったら、自分でも何かする人です。恐れや不安に見合うだけのことを自らしようとするのです。

それを、私ども、先週、三二章の前半で読んだわけです。ヤコブはエサウのもとに使者を遣わし、ご機嫌伺い（六節）をします。それが不調に終わると、財産を二組に分けて、危険の分散をはかります。更に贈り物の行列をいくつにも分け、みな御主人様への贈り物ですと言わせます。「その後で顔を合わせれば、恐らく快く迎えてくれるだろう」（二一節）と。

こうして帰郷の旅の最後の一日が終わります。今日の箇所が伝えている特異な出来事が起こったのは、その夜です。

その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った（二三～二五節）。

「その夜、ヤコブは起きて」とあります。不安によって眠りが妨げられたようにも見えますが、おそらくそうではなくて、キャラバン（隊商）は夜移動するので、ヤコブの一行も、昼の暑さを避けて行進していたものと思われます。ヤコブ自身が先頭に立ち、川を渡らせます。

ヤボクという場所ですが、ヨルダン川の支流にヤボク川というのがあり（ヨルダン川の東側）、そのどこかの渡し場です。ヤボク川は南北の境界線をなしていて、ヤコブはそれを上から下へ、つまり北から南へと渡ろうとしていたのです。目的地として

いた、郷里のカナン地方に入るには、更にヨルダン川本流を西に渡っていかなければなりません。

興味深いのは、「ヤコブは独り残った」ことです。これは、どのように考えたらよいのでしょうか。

ヤコブ以外は、人間も、家畜も、物もみな川を渡り、行進をつづけていくわけですが、ヤコブは、行列を見送るようにして、後ろに、独り、残ったのです。理由は、色んなことが考えられます。

兄エサウとの再会は近づいています。明日です。それと関係があるでしょう。エサウに襲われることも考えて、身の安全をはかるため、一行から少し離れて、独りになったのでしょうか。しかし自分だけそうすることは、考えられません。独り残った意味は一般にそう考えられてきたように、祈るためだったのでしょうか。そうだとすれば恐れと不安の中で、いやまさにそうした中でこそ、ヤコブは、神を呼び求めようとしたということです（カルヴァン）。

2　格闘

その時、次のようなことが、起こったのです。

何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまで離しません」（二五～二七節）。

「何者か」、「その人」、いずれも男性として書かれています。一人の男がヤコブに襲いかかり、夜明けまで、組み打ちしたというのです。聖書の中ではまことに特異な出来事です。

ふいに襲いかかったこの者を、ヤコブは、あるいは〈川の霊〉とでも考えたでしょうか。川べり、夜、そして夜が明けると消えてしまう、いってみれば河童伝説のようなことが、ここで起こったのでしょうか。それとも、兄エサウの回し者とでも考えたでしょうか。

もちろん、はじめはそんなこと何も考えなかったでしょう。ヤコブは死に物狂いで闘い、振り払おうとします。

ところが、夜が明けるまで組み打ちする間に、ヤコブは、相手が、他ならぬ神、神の使い（ホセア一二・五）であることに気づくのです。

気づいたきっかけは分かりません。とくに書いてあるわけでもありません。想像していいとすれば、相手から、敵から腿の関節を打たれ、はずされたことによってではないかと推測します。

確かに、この相手は、ヤコブに勝てないとみて、腿の関節を打って、腿の関節をはずしたというのです。しかし関節をはずされては戦えない。強いのは相手で、弱いの

はヤコブだということは明らかです。
ヤコブのこれまでの人生の歩みを考えて、自分の弱さを知ったのは、ここがはじめてではないかと思います。
兄エサウを欺した時から、ある意味では怖いもの知らずでここまで来たヤコブ、その自分に勝るものの存在にヤコブはここで本当に気づかされるのです。それは、神です。そして神ならば、彼にとって、二〇年前、逃れの旅に出たとき出会ったベテルの神以外にありません（二八・一〇）。そして二〇年後、帰郷を前に、マハナイムで現れた神以外にはないのです（三二・二）。取っ組み合いという、まことに前代未聞の方法ですが、神がここに来て下さっているのです。この方は祝福の神です。共にいてくださる神です。約束の神です。とすれば、いまこそ、エサウとの再会を前に、不安と恐れにおののくいまこそ、本当に祝福をいただきたいのです。祝福してもらうまでは離しません。神を求め、神にすがり、ヤコブは、夜が明けるまで神と格闘しつづけたのでした。

3　イスラエル

さて、この相手、すなわち神は、祝福してくださったのでしょうか。

「お前の名は何というのか」とその人は尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」。「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた（二八～三一節）。

〈この神は、祝福してくださったのか〉といま申しました。答えは、この箇所から明らかです。祝福してくださったのです。
この祝福は、ここで、ヤコブに、新しい、もう一つの名前を与えることによってなされています。
何よりもはじめに神はヤコブに名前を言うことを求めています。そしてヤコブは「ヤコブです」と言っています。
神は名を問うことによって、ヤコブに、自分が何者か、それをはっきり言い表すように求めているのです。ヤコブは自らの名前を口にしながら、自らの過去を思い起こし、自らの全存在を罪人と言い表したのです。そのようなヤコブに、神は祝福を与えようとしています。
他方、ここにあるように、ヤコブも、神の名を問うています。しかし神は答えていません（出エジプト三・一四、参照）。
神は、その名を明かさないことによって、ヤコブを超えた神であることを示してい

ます。ヤコブに優越する神は、その自由において、ヤコブに、イスラエルという名を与えます。罪と結びついたヤコブという名前がなくなったのではありません。そのヤコブが、しかし神の祝福の担い手となるのです。アブラハム、イサクの神の救いのもたらし手となるのです。

ところで〈イスラエル〉という言葉の字義通りの意味は、神は屈しない、神が闘うです。しかしここでは、神と闘う、という意味だと説明されています。二九節では、神と人と闘って勝った、つまり、人と闘うという言葉もくっついていますが、元々は〈神と闘う〉という意味です（ホセア一二・三以下）。

言葉の意味はここであまり気にしなくてよいと思います。神は罪人ヤコブを受け入れて、それを新しい存在として、神の救いの働きの中に生かし用いてくださるというのです。新しいヤコブの誕生です。

夜が明け、朝の光が射し込みます。そこにいるのはしかし、足を引きずり、疲れ切った、汚れきったヤコブその人です。しかしそれはまた、祝福と約束の中に生きた始めたヤコブでした。

兄エサウとの出会いはもうすぐです。三三章のはじめのところに目をやると、エサウとの再会に際して、なるほどラケルとヨセフを一番後に置くということはしていますが、自ら先頭に出て、エサウに近づいて行きます。恐れと不安、ないわけではないけれど、克服したように見えます。

さてヤボクの渡しでの夜を徹しての神との格闘、この全体を私どもどのように受けとめたらよいのでしょうか。

何よりも、第一に、教会の歴史の中でこの格闘は祈りとして、祈りを教えるものとして受けとられてきました。イエスが「やもめと裁判官」のたとえで語られた言葉を思い起こします。「神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか」（ルカ一八・七）。ヤコブの格闘は、信仰の戦いの中で、忍耐して祈るべきことを教える「祈りの比喩」なのです。

それと関連してもう一つ、ヤコブ物語を辿ってきた私どもとして、こう理解することもできると思います。神のヤコブとの格闘は、ヤコブの祈り（「どうか、兄エサウの手から救ってください」）への答えだと。なぜ答えになるのでしょうか。真に恐るべき方を前にして、エサウに対する恐れと不安は、人間的なものにすぎないと悟ることになるからです。神を恐れ、その前にきちんと生きようとすれば、人間的な恐れは克服されるはずです。

最後に、もう一つ、ヤコブの姿に、私どもイエス・キリストを重ねて見ることもできるのではないかと思います。ヘブライ人への手紙に、キリストは、罪は犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様の試練に遭われたのです（四・一五）とあります。ヤコブの試練はキリストの試練に重なります。ヤコブは神から祝福を賜りました。イエス・キリストも十字架の試練をへて、復活によって、罪との戦いに勝利し、私どもに救いと祝福をもたらしてくださったのです。改めて私ども主イエスの獲得した新しい命に信仰によってあずかりたいものです。

（一〇月二三日）